

県中教研 社会部会だより

第 38 号

発行日 令和5年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 豊岡 崇志
題 字 金山 泰仁 先生

「学習課題（問い）」の工夫

主任指導主事 本多 勝志

学習課題（問い）は、生徒の興味・関心を高めることや生徒が解決の必然性を感じることで、多様な考えを引き出すこと等を意識して設定されている。課題を工夫することは、生徒にとって主体的・対話的で深い学びとするためにも大切である。

今年度の中教研大会では、アフリカ州の特色をSDGsの視点から考える授業があった。「地理的な見方・考え方」を働かせながら、地球的課題の要因や影響をアフリカ州の地域的特色と関連付けて考察することがねらいである。教師の、「SDGsのどの目標がアフリカの課題と関わりが深いか」という問いに対して、ある生徒は「飢餓をゼロに」を挙げた。理由は、「アフリカでは、干ばつや砂漠化の影響で食料不足が頻繁に発生しているから、この目標と関連が強い」と答えた。「場所」や「人間と自然環境との相互依存関係」といった視点に着目して思考・判断したことを説明していた。

別の研究授業では、江戸幕府の経済や農業、文化の面で、「誰の改革が人々にとって最も優れた改革だったか」という問いに対して、初めは田沼意次としていたが、熟考した上で、「経済面で考えると、田沼の政治は多くの人々にとってではなく特定の人だけに優れた改革になるから、徳川吉宗にした」と考えが変容した生徒がいた。「類似」や「差異」、「原因」や「結果」等の視点に着目して、課題を多面的・多角的に考えていた好事例である。

このように、根拠や理由を明確にした考えを引き出せるようにするには、課題解決的な学習の展開が不可欠である。また、各学校において単元の目標に到達するために、生徒が「見方・考え方」を働かせて考察できる学習課題（問い）を工夫することが必要である。それにより、生徒の「思考力・判断力・表現力等」をはじめとした、三つの資質・能力がより一層育成されることを願っている。

（東部教育事務所）

授業から学ぶ

部長 豊岡 崇志

コロナ禍は、3年が経過し、未だに収束の見通しは立ちませんが、既に公民的分野の教科書には、新型コロナウイルス感染症が公共の福祉に基づく人権の制限の事例として登場しています。社会科教員としては、コロナ禍を社会現象ではなく、「社会的な見方・考え方」を働かせ追究したり解決したりすべき課題を有する社会的事象として、自分の授業であれば、どのような場面で取り上げることができるのかを考える時期にきているかもしれません。

さて、第66回研究大会は3年ぶりに4地区で全部員参集のもと開催することができ、富山・高岡地区では授業力向上アドバイザー・米田豊名誉教授（兵庫教育大）による講演も実施されました。コロナ禍による研修機会の制限に加え、近年は社会科教員が2人以下の学校も増えていることから、特に若手教員にとっては、他校で社会科の授業を参観して、協議会で多くの部員と意見を交わし、専門家の講演を聞くことのできた貴重な機会となったと考えます。

文部科学省で視学官をされた澤井陽介氏は著書「授業の見方」の中で、「授業を見なければ、授業は変わらない。授業を見せなければ、授業は変わらない。授業研究でしか、授業は変わらない」と書いています。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が求められていますが、普段の自分の授業のよしあし、特に改善すべき課題は自覚しにくいものです。今大会では、地域やSDGsを題材にした課題設定、ICTや思考ツールの活用等、様々な研究の素材が提案されました。他者の授業を見ることで、自分の授業と重ね合わせ自分であればどのような授業をするのかを考えたり、協議会で明らかになった成果や課題を基に自分の授業はこれでよいのか、授業改善の糸口を見いだしたりする機会として、改めて中教研で授業研究を進めていく重要性を感じます。

（富・奥田中）

第 66 回 研 究

新 川 地 区

(滑・早月中)

(1) 研究授業

渡邊慎也教諭が、1年地理的分野「世界の諸地域 アフリカ州」の単元で「アフリカ州が抱える問題と最も関連が強いSDGsの目標はどれだろうか」という学習課題で授業を行った。授業では、生徒各自が課題に対して考えたことを班で共有した。その中で、Xチャートを用いることで、生徒は様々な事象の関係性を発見することができ、何が重要なのか、何が共通しているのかということに気付くことができた。その後、班の中で課題に対する考えをまとめ、全体の場で発表した。様々な視点や立場からの意見を聞き、話し合う中で、アフリカ州の問題とSDGsの関連について多面的・多角的に考えていた。終末では、話し合いを踏まえて意見を再構築し、自らの考えを表現できていた。



(2) 部会協議

部会協議では、「Xチャートにより生徒の思考が可視化され、話し合いが活発になっていた」「全体でも意見交流を行うことで、意見を再構築していた」という意見の一方で、「班編成に工夫を凝らしてもよかったのではないか」「ICTの使い方に改善の余地があるのではないか」等の意見が挙がった。

本多勝志主任指導主事（東部教育事務所）からは、生徒の話し合いについて、目的が明確でとても活発だったと評価をいただいた。また、意見を再構築させる際には、メモをとらせたり、質問をさせたりした上で、自他の意見を比較・関連付けるとよいこと、ICTについては、効果的に活用する場面を絞ることが大切であると助言していただいた。

後半は、学習評価について、日頃抱えている悩みについて協議した。ベテラン・中堅・若手教員を組み合わせた班編成になっており、普段は相談できないことを話し合ったり、先輩の教員からアドバイスを受けたりすることができ、今後の授業に生かすことができる有意義な協議会となった。

長谷悠太郎（黒・明峰中）

富 山 地 区

(富・八尾中)

(1) 研究授業

1年地理的分野で畑佐知弘教諭が「アジアに新工場をつくるとしたら、どの地域がよいのだろうか」という学習課題で授業を行った。生徒が既習事項を活用しながら、様々な視点から意見を考え、互いに発表し合う活動を通して、自らの考えを広げていた。3年公民的分野では、林友徳教諭が「誰もが50年後も住み続けられる八尾地域にするにはどのようなまちづくりを進めていけばよいのだろうか」という学習課題で授業を行った。



事前に市役所職員の講演や地域住民へのアンケートを実施して、生徒が多様な事実を基に多角的に考えることができるよう工夫がなされたり、授業では班活動の話し合いや全体で意見を共有する場を設けた後、再度個人で考える場を取り入れたことで、生徒の意見に変容が見られ、一人一人が学習課題に対して自分の考えを深めることにつながっていた。



(2) 部会協議

部会協議では、小嶋剛指導主事（西部教育事務所）からは、生徒一人一人が本時の課題に対する自分の考えをもち、自信をもって話し合いに参加していたことを成果として挙げていただいた。また、話し合い活動においては、生徒が課題の解決方法により客観的に選択・判断できるように、選択・判断の基となる資料を確認することが必要であるなど、授業改善のポイントを助言していただいた。

大茂孝二郎指導主事（東部教育事務所）からは、生徒への切り返しが効果的であったことや、本時を通して、生徒が一つの問題の背景に様々な要因があることを認識できた点を成果として指摘いただいた。また、単元を貫く問いの大切さ、本時の学習課題や展開の例を具体的に提示しながら授業改善のポイントを助言していただいた。

滝脇 功越（富・新庄中）

大会報告

高岡地区

(射・小杉中)

(1) 研究授業

橋本晃洋教諭が、1年歴史的分野「なぜ藤原氏が政治をしていたところに、国風文化が発展したのか」という学習課題で授業を行った。授業では、平安時代の生活に関する資料カードを各グループに配付し、ホワイトボード上で「政治」「生活」「外国との関係」等の視点で話し合いながらカードを分類することで、文化の形成には様々な要因があることに気付くことができるようにした。また、国風文化と天平文化を比較することで、共通する視点や新たな視点に気づき、文化が発展する理由について多面的に捉えることができることをねらいとした。



小嶋剛指導主事(西部教育事務所)からは、振り返りの時間を確実に設定し、生徒に学習の成果を自覚させることや次時への学習に向かって粘り強く取り組む姿へつなげていくことが大切であると助言していただいた。また、話し合い活動では教師はファシリテーターとして、課題に対して生徒同士が議論し、協働的に解決することができるように支援することが必要であると教えていただいた。

(2) 授業力向上アドバイザーによる講演

兵庫教育大学名誉教授の米田豊先生より、「社会科授業研究に論理整合性(つじつまが合っていること)を」と題し講演いただいた。学習指導案には生徒に到達してほしいこと(発言や記述内容)を具体的に示す必要があること、「会話」ではなく「対話」を組み込んだ授業構成になっていること等について助言をいただいた。

また、授業は「問いと目標と指導と評価」が一体化している(つじつまが合っている)必要があることについて、実際の授業場面だけでなく、学習指導案作成の段階においても助言をいただいた。

田畑 悟(射・小杉南中)

砺波地区

(南・南砺つばき学舎)

(1) 研究授業

吉田佳織教諭が、2年地理的分野「交通網の整備により、中国・四国地方はよりよい地域になったのか」という学習課題で授業を行った。授業では、班ごとに考えを産業・人口・生活の3つの視点からなるYチャートに分類し、学習課題に対する班の考えをまとめて発表した。全体での話し合いを通し、交通網の整備に伴うデメリットを異なる立場から捉えることでより多角的に考えられるようになった生徒もみられ、思考ツールが効果的に活用されていた。



(2) 部会協議

部会協議では、吉田教諭の日頃の指導の成果が生徒の資料を読み取る力や自分で決断する様子に現れていることや、学習課題の解釈の違い(例えば交通網とは本州四国連絡橋に限定するのか、地域とは瀬戸内だけなのか山陰や南四国も含むのか)により考えが異なるなどの意見があった。

福山暁雄指導主事(西部教育事務所)からは、「本時を単元のまとめに位置付けるならば、生徒に身近な地域の課題との相違を気付かせるような展開も考えられたのではないか」という助言をいただいた。

後半はグループごとに「思考・判断・表現」の観点から評価問題を作問するワークショップを行った。福山指導主事からは、「根拠となる資料、因果関係、複数の資料を比較・分類・関連付けた考え」を問う問題が必要であるという話があった。また、「評定に用いる評価」と「学習改善につなげる評価」の区別や、「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法について助言していただいた。最後に、生徒がただ考えを伝え合うだけではなく、自分の意見が相手に変化をもたらしたことを実感する話し合いの大切さについて話されるなど、会員にとって励みとなる研究大会であった。

福田志寿子(小・蟹谷中)

魚津市中教研社会部会・活動報告

魚津市中教研社会部会では、10月に県中教研社会部会及び各学校の研究主題を踏まえた研究授業と6月に教員を対象にした現地研修会を実施した。

研究授業では、東部中学校の河村領太教諭が2年地理的分野「日本の諸地域」の単元で「火山が生活や産業にもたらす影響とは何か」という学習課題で授業を行った。授業では、資料から読み取ることができたことを思考ツールのYチャートを活用し、班でまとめた。Yチャートに、3つの視点(①住民の苦労②火山の恵み③住民の工夫や行政の対策等)を提示することで、班での話し合いを深めることができた。また、班に1台のタブレット端末を使用し、班でまとめた意見等を教室の大型モニターに映し出す場面があり、考えを共有する場面におけるICTの活用が効果的であることを確認できた。



現地研修会は、魚津市に本社がある株式会社アイザック・ユーを見学した。最初に企業理念や建材事業の枠を超えて様々な事業を展開していることについて説明を受けた。また、新型コロナウイルスの飛沫感染対策に使われるアクリル板の製造・販売も行っており、時代のニーズに対応した製品の開発等、社会の変化に合わせた経営を行っていることを学んだ。その後、ビル用サッシ等の製品工場に出向き、資材から加工され、養生・梱包されるまでの過程を見学した。製造工程には、生産性や効率を上げる工夫が随所に見られ、今後の労働人口の減少を見据えた企業努力の一端を学ぶことができた。



この現地研修会では、実際に足を運び体験することの大切さを再確認した。今後も授業実践や現地研修会を通じて、さらなる授業力の向上を目指していきたい。

永森 勇希(魚・西部中)

高岡市中教研社会部会・活動報告

高岡市中教研社会部会では、毎年、高岡市中教研より予算をいただき、生徒を対象にした現地学習会を夏休みに実施している。市内12校を2グループに分け、毎年6校から6～8名、あわせて約40名の生徒が参加し、貸切バス1台に乗って、それぞれの見学地に出向き、学習している。

この2年間はコロナ禍のため開催を見送ってきたが、本年度は日程を1日から午前中のみに短縮し、見学地



を1つに絞り、感染対策を講じて実施に踏み切った。見学地として選んだのは、旧西広谷小学校の校舎を利用して開館した、高岡市埋蔵文化センターで、高岡市教育委員会文化財保護活用課の方々が考古学教室を行っている施設である。この教室では、実際に高岡のどの場所に、どの時代の遺跡があり、どのような人々の営みがあったかを講義していただいたり、そこで発掘された縄文土器や弥生土器を実際に手にすることもできたりし、遠い昔の時代の人々の生活を身近に感じることができる。また、勾玉づくりも体験でき、鉄がなかった当時、どうやって石に穴を開け、曲がった形に削ったのかを当時の道具を使って直に体験することで、縄文人の工夫と苦労を肌で感じる事ができた。



社会部会では、社会的事象を多面的・多角的に考察することができる生徒の育成を目指しているが、実際に現物に触れたり、当時の生活を体験したりした生徒たちの感想からは、同じ土器を機能面と芸術面から観察したり、縄文人の立場から当時の苦労について考えたりしたことが伺えた。ICTの発達に伴い、社会的事象に触れる機会や方法も多様化してきたが、現場に足を運んで体験してこそ得られる感動に勝るものはないことを現地学習会を通して再確認することができた。

橘 恭幸(高・芳野中)